

### 現代日本家族の親子生活：2001年-2011年の生活時間から

城西国際大学  
品田知美

日本人の生活時間配分に関する国際比較によると、有償労働が長く無償労働が短いことがわかっている。ただし、子どものいる核家族のみで比較すると無償労働はむしろ長いという特徴も知られる(品田 2007)。また、配偶者のいる女性の家事時間合計にかんして 1976 年からの変化をみると、無業者は 1991 年をピークに減少しているが、有業者は 1 日あたり 15 分増加している。特に増加の著しい行為は育児であり、1986 年から 2011 年にかけて有業者が 60 分、無業者が 68 分増加している(品田 2016)。

一方で、子育てには時間のみならず多額の費用を必要とし、実質賃金が低下するなかで物価が上昇していることも相まって、近年は出産後早めに職場復帰を希望する女性が増えている。だが、母親が有償労働に割いている時間はすでに、2001 年の時点でイギリスやオランダよりも長く、母子家庭でも仕事に出ている割合が高いのも日本の特徴であった。

このような背景的認識のもと、本報告では、総務省統計局による平成 23 年度社会生活基本調査報告の調査票 B「詳細行動分類による生活時間」の集計表から抜粋比較することで、現代子育て中の家族の生活時間の集計データを解釈し、現在の親子生活を理解する。得られた論点の 1 つに、親の有償労働のさらなる過酷化がある。2011 年に子どもが小学校高学年時に、共働きの家族は父親は週あたり 55 時間、母親は 33 時間有償労働に出ていた。母親もすでに平均で短時間労働の水準を超えているのである。さらに片働きであれば、父親の労働は約 59 時間ともなる。このように父親が不在であるままに母も不在化しつつある現実がすでにある。

また、末子が小学生の場合に無償/有償合わせた総労働時間が長い親の集団とは、末子が小学校高学年の共働きの女性：606(分/日)、高学年の片働きの男性：605(分/日)であった。したがって、このライフステージでは共働き家庭では女性が、片働き家庭では男性が問題化される状況といえる。一方、子どもが小学校で時間圧力が比較的低い集団とは、低学年で片働きの女性：462(分/日)、低学年で共働きの男性：533(分/日)となっていた。さらに、学歴による生活時間には年代によりかなり特徴的な傾向がある。例えば、食事の管理にかけている時間は、46-64 歳では大卒の方が長い、前後の世代ではその傾向がみられない。また、45 歳未満は極端に食事の管理に時間を割かなくなっている。全国家族調査による 1999 年から 2009 にかけての変化から、社会階層による親子関係の差が拡大する傾向がみられていたが(品田 2011)、生活時間においてどのような変化がみられるのかについて検証し、考察を加えたい。

#### 参考文献

- 品田知美,2007,「家事と家族の日常生活：主婦はなぜ暇にならなかったのか」学文社。  
品田知美,2011,「母親の子どもに対するかかわり方はどう変化したか」福田 亘孝, 西野 理子(編)『第 3 回家族についての全国調査(NFRJ08) 第 2 次報告書 第 3 巻：家族形成と育児』(日本家族社会学会 全国家族調査委員会). p. 29-46.  
品田知美, 2016, 「家族の生活時間とワークライフバランス」松信ひろみ編著『近代家族のゆらぎと新しい家族のかたち』第 2 版, 八千代出版。